

アライグマと狂犬病問題

川道武男 (関西野生生物研究所)

北米の在来種であるアライグマは、日本全国で建築物への侵入や農作物被害を引き起こしている。日本での現状は、北米の生息環境を基本的に反映するが、アライグマにとっては新たに日本の環境に適応しなければならなかった課題もある。

北米ではアライグマが分布を拡大し、北上してカナダにも生息する。元来、アライグマ科動物は暑い地方が中心の動物であるが、日本では気候の厳しい北海道でも蔓延している。住宅地をうろつくのは、北米も日本も同様である。

北米では、メスが樹洞で出産・子育てする。日本に連れてこられたアライグマは、社寺の天井裏で繁殖することも多い。近畿地方では、アライグマの出没情報の多くが社寺からの通報である。社寺の建物は太い木を組み合わせており、構造が開放的で、外から侵入するのが容易である。天井裏は樹洞の代用になり、アライグマは一つの課題を容易に解決した。

近年の一般民家は、内部へ侵入するのが構造的に難しい。古い民家には縁の下があり、縁の下から壁の内側を伝って天井まで登ることの出来る構造もある。

天井裏では、多量の糞と多量の尿を排泄し、断熱材や天井板を破壊する。ウサギの頭骨が発見された例もある。尿は壁に垂れ、照明器具の中に尿が溜まった例もあり、漏電の危険も十分ある。天井裏へ上る柱には、5本指の爪痕が残される。ただし、外部寄生虫が天井から落ちて、住んでいる住民が被害を受けた報告はない。

社寺の建築物は多くが重要文化財や国宝に指定されており、文化財の被害は相当なものである。さらに、社寺内部には多くの貴重な文化財が含まれる。そこへアライグマが天井から転げ落ちたり、お供物を狙って、仏像や絵画などの文物を傷つける。

住宅地に現れるアライグマは大きな問題を抱える。人間にも感染する狂犬病に罹るからである。狂犬病はアメリカ合衆国東部のアライグマ個体群で広がっている。他に、スカンク、コウモリ類、コヨーテ、キツネにも罹る。そこで、アメリカ政府は年間 300 億円を投じて、狂犬病の拡大を食い止めようとしている。その方法は、経口ワクチンを混ぜた餌を飛行機で撒いて発病を防ごうというものである。狂犬病の感染地域全域に撒くには費用がかかりすぎるので、感染地域の西端境界を中心に撒いて、西方への感染地域の拡大を防ぐ試みである。

日本では昭和 31 年 (1956 年) に狂犬病が根絶され、以降出現していない (狂犬病はリッサウイルス属 *Rabies virus* による)。大阪府獣医師会の「日本の狂犬病」に狂犬病の発生とその歴史が詳しい。以下引用しよう (<http://www.osakafuju.or.jp/hydrophobia/history.html>)

「日本で狂犬病の流行が記録されているのは 18 世紀以降である。八代将軍徳川吉宗が支配した享保年間には狂犬病の大流行がみられ、イヌ、ウマ、キツネ、タヌキなどが多数犠牲になったことが記されているという。また幕府の医官であった野呂元丈 (1692~1761) は著書『狂犬咬傷治方』の中で「咬まれた傷は軽くとも、あとで再び病が重くなって十中の八、九は死ぬから瘡口は早く血を吸い出して灸をすえるがよい」と記している。(略)

明治時代の初期から中期には、狂犬病が地域的に流行し、時にはかなり広範囲に流行が及んだ。特に人口もイヌ頭数も多かった東京では、しばしば狂犬病の流行に悩まされたようである。しかし、全国レベルでも府県レベルでも、狂犬病発生件数を集計し記録する体制は整っていなかったため、発生件数を明らかにすることはできず、個別的な流行の記録によって流行の程度を推定するほかない。

東京では 1870 年に狂犬病の発生が郊外にも及び、引き続き発生がみられたため、東京府は 1876 年に畜犬規則を定めた。その後も狂犬病の発生はおさまらず、1881 年には畜犬取締規則が制定された。1881 年以降も狂犬病の流行が続き 1886 年には東京府下で 7 名の狂犬病による死者が出た。

1893 年 2 月、長崎市に外国人が持ち込んだイヌから狂犬病流行が発生し、5 月までにイヌ

資料9

に咬まれた被害者は76名、狂犬病による死者は10名に達した。この間、市民はイヌを撲殺したため、殺されたイヌは735頭を数えたという。

1894～95年にかけて長崎県全域に狂犬病の流行が広がり、狂犬病による死者は21名となった。その後、狂犬病はさらに九州全域に広がり、流行は1902年まで続いた。この狂犬病流行に際して、当時の長崎病院内科医長栗本東明が、1895年に日本で最初のパストゥール法による曝露後免疫を行った。栗本の曝露後免疫を受けた者は15カ月間で62名に達し、うち2名が免疫治療中に発病して死亡したといわれている。また1893年には神奈川県足柄郡に、1894年には山口県佐波郡に狂犬病が流行して牛馬の被害が大きかったという。1896年に獣疫予防法が制定された。本法は狂犬病を獣疫（家畜法定伝染病）の中に規定し、狂犬病のイヌの殺処分を定めた。またこれによって1897年から全国の狂犬病発生件数が公式に記録されるようになった。

1897年8月からは伝染病研究所でもパストゥール法による曝露後免疫が開始された。伝染病研究所では発病予防処置を希望して来所する咬傷被害者にワクチン接種を行ったばかりでなく、地方での狂犬病流行に際しては出張治療も行ったようである。

1905年11月、神戸市を中心に始まった狂犬病の流行は兵庫県下に広がって約3カ年に及び、この間4,000人以上の咬傷被害者と45名の狂犬病死亡者を出した。流行の発端は猟犬を伴って岡山地方から来た猟師が宿泊した家の飼いイヌであったといわれている。

1906年には青森県下で狂犬病が流行し、狂犬病のイヌ157頭、狂犬病のウマ6頭、狂犬病死亡者11名の被害を出したが、流行の発端は日露戦争後に樺太から凱旋した軍人が連れ帰ったイヌであるといわれている。

1907年には突然、北海道室蘭に狂犬病のイヌが現れ、またたく間に近隣地方に広まり、4カ月足らずの間に狂犬病のイヌ252頭、狂犬病死亡者21名に達したという。また流行の発端は青森県から移入された狂犬病潜伏期のイヌであるとされている。

1907年には静岡県下でも狂犬病の流行が発生し、神奈川県足柄郡にも飛び火し、1908年には山梨県でも狂犬病の流行がみられた。また神奈川県横浜を中心とした流行が1908年から1909年にかけて発生した。

1910年には宮城県の流行が岩手県下に侵入し、東京、神奈川、千葉で、また長野、九州でも狂犬病の発生がみられた。1911年、東京で狂犬病が大流行し、その他の地方でも多数発生がみられ、明治末期の狂犬病発生増加傾向は大正時代に入ってより顕著となる。

1918年、梅野と土井が神奈川県で初めてイヌの集団予防接種を行い、1919年には東京でも集団予防接種を開始した。その効果は狂犬病のイヌおよび咬傷被害者の減少として現れた。1921年から23年にかけて、全国の狂犬病発生件数は増加しているのに対して東京では384件、212件、126件と減少を続けた。しかし、1923年の関東大震災による混乱のため1924年には726件と激増した。

1923年には流行の中心は大阪に移り、狂犬病のイヌは1,338頭に達して全国発生の約半数を占めた。また例年、狂犬病発生がみられなかった北陸地方、四国地方でも狂犬病が発生し、全国規模の流行となった。1924年は関東大震災の影響で東京での狂犬病発生件数が700件を超えただけでなく、大阪でも600件以上、神奈川県と兵庫県でも200件以上となり、史上最多の発生件数に達した。

これより先の1922年には家畜伝染病予防法が制定された。これによって、イヌばかりでなく、狂犬病を発病したすべての家畜の殺処分が定められた。1925年から飼いイヌの予防接種と野良イヌの取り締まりが強力に進められた。

1925年にも大阪700件、東京600件、神奈川500件、兵庫400件以上の狂犬病発生があり、前年とほとんど変わらない件数であったが、1926年以降は明らかに減少し始める。1925年からは東京に替わって大阪での発生件数が全国最多となったが、大阪での大流行も1929年の116件を最後に急激に減少した。1930年には全国発生件数が2桁になり、1933年から43年までの発生件数は1～21件になった。」。

狂犬病は発症後の死亡率はほぼ100%近く（これまでに発症後に助かった人は世界でも5名だけのこと）、極めて危険な疾病である。主にペット由来である日本のアライグマは、人を

資料9

恐れず、人家付近にも出没し、ペットフードを好んで食べる。その際、イヌ、ネコなどのペットを咬む事例も多く報告されている。アライグマは森林や川や湖のある地域なども生息地として好み、そこで、タヌキ、キツネ、アナグマなど様々な在来の哺乳類と出会うことが考えられ、過去に野犬と飼い犬、家畜の間で広がった狂犬病とは違って、アライグマを通じて野生生物の間で蔓延し、アライグマを介してペットや人間に感染の危険を及ぼす、これまでになかった「感染の輪」をつくる可能性が高い。

調査によると、日本のアライグマに狂犬病の抗体をもった個体は現在みつかっていない。しかし、日本の周辺国（台湾、中国、韓国、ロシア）では狂犬病ウィルスが分布しているから、日本へ侵入する機会は潜在的に多いと考えられる。特に日本と同様に狂犬病清浄国であった台湾のイタチアナグマに2013年狂犬病が確認されたことは、日本にも狂犬病上陸の可能性があることを示唆する（台湾のイタチアナグマへの狂犬病感染経路は不明である）。とくに危険と考えられるのが、ロシア船が来航する日本海側の港である。ロシア船内で犬を飼っていることが多く、日本の港から出港するまで逃げ出したり、船員が野放しにしたり、放置して出港することもあるからである。そこで、関西野生生物研究所はロシアの船舶が停泊する可能性の大きな港湾のある地域でのアライグマ数の減少と根絶を目指すことも主要な目的として活動している。特に京都府舞鶴市の舞鶴港は市街地に接しているため、舞鶴市行政と協力しあい、舞鶴市は2013年までにアライグマ個体数を減少させることに成功した。これは狂犬病対策としても将来に向けた一つのモデルケースになるだろう。